

現代日本人における「道徳性」に関する 意識構造の心理学的解明の試論

—「道徳性尺度」作成のための予備的調査(2)—

A Study on the Sense of Morality in Japan : A Preliminary Research(2).

阿 部 洋 子

要 旨

現在、発行されている小学校および中学校の「道徳」の教科書で扱われている下位項目と、かつて使われていた「修身」の教科書で扱われていた徳目に対して、現代日本人が、どのような意識を持っているかを検討するに先立ち、それらの項目を類似項目ごとに束ねることにより、道徳性として、どのような大項目に分類されるかを確認をすることにした。

調査1では、「道徳」について特に興味・関心がある訳ではない青年女子39人を対象に、111項目の道徳的に「良い」とされている行為を、辞書を用いず、類似概念で括るという作業をして貰った。その結果、13項目は「意味不明」とされたので、これを除いた98項目について、その意識構造を検討することを目的とした。

調査2では、教職にあり、「道徳」について興味・関心が高い成人5人を調査対象者とし、前回(阿部; 2004)は道徳的に「良い」行為を認知的側面からその重要性・適切性を判定して貰ったが、今回はそれらの行為の情緒的側面を測定するために、SD法を実施したい旨を伝え、151対ある「形容詞(形容語)」の評定の難易度および適切さを判定して貰うことにした。

その結果、道徳的に良い行為は4つの大項目に分類された。「思いやり」「自由・人権・平等」「責任感・勇気・誠実・強い意志・我慢」「その他」であった。「思いやり」には56項目が分類され、基本的には「愛」に関する項目であった。しかし、一方では「何かを成し遂げる」という項目とは負の相関が見られ「優しいが、強い意志に欠ける姿」が見られた。

「形容詞(形容語)対」の評価の難易度および適切性についてのクロス表を作成したところ、適切性・重要性共に、上位1/3に入る項目、即ち道徳性を情緒面で考えるに当たり、非常に評価が容易であり、且つ適切だと判断された項目は55項目であった。これらを用いて「思いやり」を測

定することは可能だが、「強い意志」を測定することは困難ではないかと感ずる結果となった。「形容詞（形容語）対」の選定においても「調査1」と同様に「優しいが、強い意志に欠ける姿」が見られた。

問 題

子どもに道徳性を身につけさせたい、また身につけることは重要なことだと思っている親や教師は多いはずである。しかしその思いとは裏腹に犯罪や、他人に迷惑をかける問題行動は減少していない。経済的には豊かになったのに、精神的には貧しくなったという批判も日常的によく耳にする。

何故、このようなことが言われるようになったのだろうか。学歴偏重社会、親子関係の希薄化、モラルの廃頹などいくつかの説明概念が提出されているが、決定的なものは示されていない。現代日本人において“道徳性に関する意識構造”は悪い方へ変わったのであろうか。もしそうだとすれば何がどのように変わったのであろうか。

社会が荒廃したときに、問題行動を起こすなどして、最初に犠牲になるのが児童・青年などの若者たちである。若者の道徳性に関する問題行動の背景には、大人の問題行動があると言えよう。そのためにも、現代日本人の若者、大人の両方に利用可能な道徳性尺度を作成することは、それに歯止めをかける一助となるのではないかと考える。

なお「問題」については前回の報告（阿部；2004）に詳細を述べたので、そちらを御参照頂きたい。

目的および方法

本研究は、阿部（2004）の調査研究の続報である。即ち第一に、現代日本において、道徳的に「良い」行為とはどのようなものであるかを調査するに当たり、それらの行為を最小限に絞り込むことにある。検討対象とした「道徳に関する項目」は、現在、発行されている文部科学省検定済みの「小学校・道徳」「中学校・道徳」の教科書で扱われている下位項目と、かつて使われていた「修身」の教科書で扱われていた徳目を用いた。それらの項目を類似した概念で分類することによって、道徳的に良いとされる行為とはどのようなものか。またそれらはどのような構造を成しているかを検討する。更にそれらの項目の情緒的側面の測定を実施するため、SD法を用いる必要があると考えた。そこでSD法に用いる「形容詞（形容語）対」の選定を実施した。

(1) 調査対象者

調査は2段階で実施した。即ち、調査1では、「道徳」について特に興味・関心がある訳ではない青年女子を対象に、100以上列挙されている道徳的に「良い」とされている行為を、辞書を

用いず、似た意味をもっていると考えられる行為をグルーピングして貰い、そのグループの中から代表的な行為を選定することにした。その際、意味不明な言葉、イメージできない言葉については、グルーピングを行わず、取り置いて貰うこととした。これらの行為は今後予定している「道徳性の意識構造」の調査の項目として残すこと自体が無意味だからである。この篩い分けの結果、即ち「死語となった行為」については既に報告済みである（阿部；2004）。

調査2では、「道徳」について興味・関心の高い成人を対象に、道徳的に「良い」行為を情緒的側面から測定するに当たりSD法を実施したい旨を伝え、それに先立つ調査として、200以上列挙された「形容詞（形容語）対」の評定の難易度および適切さを判定して貰うこととした。調査1・2の調査対象者は次の通りである。

調査1：埼玉県私立女子大生39人（年齢：平均=20.88歳、SD=1.33）。

調査2：小学校教師（男性1名）、中学校教師（男性1名）、大学教師（女性2名）、塾教師（女性1名）の成人男女、計5人（年齢：平均=40.2歳、SD=7.88）。

(2) 調査用紙および調査期間

調査1：現在、発行されている文部科学省検定済みの「小学校・道徳」「中学校・道徳」の教科書で扱われている下位項目と、かつて使われていた「修身」の教科書で扱われていた徳目から、合計111項目を抽出し、それらをカード化し、辞書を用いることなく、類似概念で括るよう求めた。その際、意味不明な言葉、イメージできない言葉については、グルーピングを行わず、取り置いて貰うこととした。実施方法は、留置法であり、1週間以内に調査者に直接、手渡しで返却するよう求めた。調査期間は、平成15年7月の約1ヶ月間であり、回収率は100%であった。

調査2：道徳的に「良い」行為を適切さと重要さで判断して貰うことはその行為に対する認知的側面を測定することになる。そこで道徳的に「良い」行為を情緒的側面から測定するに当たりSD法を実施したい旨を伝え、151対の「形容詞（形容語）」についてその評定の難易度および適切さを検討するために独自の調査用紙を作成した。適切性については「適切である：5点」「どちらかと言えば適切である：4点」「どちらとも言えない：3点」「どちらかと言えば不適切である：2点」「不適切である：1点」の5件法による評定をして貰った。難易度については「評定し易い：5点」「どちらかと言えば評定し易い：4点」「どちらとも言えない：3点」「どちらかと言えば難しい：2点」「評定し難い：1点」の5件法による評定をして貰った。なお回答するに当たり、辞書類を見ないで判断するよう求めた。また真摯な態度で、時間を十分かけて回答をする必要があるため、実施方法は留置法であり、2週間程度を目安に回答を終え、郵送にて返却するよう求めた。調査期間は、平成15年3月の約1ヶ月間であり、回収率は100%であった。

結果

調査1：20歳代の青年たちによって、言葉の意味が理解できない、あるいはイメージが湧かないと判断された項目を除去しつつ、道徳的に「良い」とされている、あるいはされていた行為について類似の概念でグルーピングを実施して貰った。その結果、調査対象者39名中、意味不明の言葉は1つもないと回答したのは2名であり、37名は2～26項目の範囲で意味不明の言葉があると回答した。なお調査対象者の1/4である10名（25.64%）以上によって意味不明と選択された項目は、「敬虔」「不撓不屈」「廉潔」「長幼の序」「孝養」「克己」「至誠」「遵法の精神」「公德心」「立志」「仁愛」「度量」「分を知る」の13項目であった（阿部；2004）。

グルーピングの結果を整理するに当たり、調査対象者の1/5の8人以上が類似概念だと回答したものを表1に示した。最も大きなグループを形成したのは「思いやり」であり、「親切：27人」「慈悲：19人」「人情：18人」など24項目が類似概念だと判断された。次は「生命尊重」であり、

表1. 道徳性に関する項目の類似性による分類結果

項目	思いやり	生命尊重	平等	健全な異性愛	社会への奉仕
親切	27	自然への愛 18	公平 23	規則正しい生活 12	社会連帯の精神 10
慈悲	19	動物愛護 17	公正 20	整理整頓 8	
人情	18	生き物を憐れむ 16	人権 13	健康 8	
寛大	17	植物愛護 16	公益 10		
感謝	15	自然への畏敬 12	国民の義務 9		
人間愛	15	人類愛 11		責任感	
慈愛	15	愛国心 11		自律 10	
謝恩	15	人権 10	物の活用	勇気 9	
友情	14	生きる喜び 10	金銭活用 18		
寛容	14	博愛 9	節約 14		
恩	14	愛校心 9	儉約 12	個性の伸長	
仁愛	13	人間愛 8	創意工夫 11	探究心 10	
家族愛	13	慈愛 8	合理性 8	向上心 10	
きょうだい愛	12	郷土愛 8			
親孝行	12				
慈善	11			我慢	
人類愛	10			忍耐 11	
博愛	10			堪忍 10	
思慮深さ	9				
謙虚	9				
信頼	9			勤勉	
先祖を敬う	9			勉学 10	
同情	8			勤労 9	

「自然への愛：18人」「動物愛護：17人」「人類愛：11人」など14項目が類似概念だと判断された。次が「平等」で5項目、「物の活用」が5項目、「健全な異性愛」が3項目、「勤勉」が2項目、「我慢」が2項目、「個性の伸長」が2項目、「責任感」が2項目、「社会への奉仕」が1項目となった。

道徳に関する項目の「相関分析」による検討

(1) 思いやり

「思いやり」は、「親切 ($r=.59, p<.01$)」、「譲り合い ($r=.52, p<.01$)」、「慈悲 ($r=.41, p<.01$)」、「感謝 ($r=.42, p<.01$)」、「人情 ($r=.41, p<.01$)」を始め、慈愛、寛容、寛大、親孝行、謝恩、献身、家族愛、恩、友情、人間愛、人類愛、信頼、慈善、博愛など、「愛」に関わる事柄と正の相関が見られた。また有意差は見出せなかったが、「生命尊重 ($r=.13$)」、「生き物を憐れむ ($r=.11$)」、「郷土愛 ($r=.13$)」とも関係する傾向が見られた。

一方「思いやり」は、「何かを成し遂げる」という項目と、負の相関の傾向が見られた。有意差は見られなかったが、「責任感 ($r=-.09$)」、「個性の伸長 ($r=-.16$)」、「規則正しい生活 ($r=-.15$)」、「自律 ($r=-.15$)」、「探究心 ($r=-.11$)」、「勤勉 ($r=-.11$)」、「努力 ($r=-.12$)」、「勤労 ($r=-.10$)」、「理想の実現 ($r=-.12$)」、「規律尊重 ($r=-.10$)」などであった。

今回、項目分類作業に用いたのは、99項目であったが、「思いやり」と正の相関が見られたのは20項目、有意差は見られなかったが、関係する傾向がみられたのは35項目（内、22項目は負の関係）であった。即ち、道徳の教科書などで取り上げられている項目の1/2が「思いやり」に関係する行為だという結果が得られた。

(2) 自由・人権・平等

「自由」「人権」「平等」は、いずれも同じような項目と正の相関の傾向が見られた。

「平等」においては、「公平 ($r=.71, p<.01$)」、「公正 ($r=.65, p<.01$)」、「人権 ($r=.47, p<.01$)」、「国民の義務 ($r=.32, p<.01$)」を始め、社会への奉仕、他人の名誉を傷つけない、国際理解、規律尊重、調和、秩序尊重、公益などとの間に正の相関が見られた。また有意差は見出せなかったが、「自由 ($r=.14$)」と関係する傾向が見られた。

「人権」においては、「平等 ($r=.47, p<.01$)」、「生命尊重 ($r=.26, p<.01$)」を始め、公正、他人の名誉を傷つけない、国民の義務などとの間に正の相関が見られた。また有意差は見出せなかったが、「自由 ($r=.14$)」と関係する傾向が見られた。

「自由」という項目は、前回の報告（阿部；2004）でも、道徳性を測定する項目としての適切性・重要性において低得点を示した。これは「自由」が「勝手気まま」に繋がるということからなのか、どの項目とも有意な関係が見られず、独立して捉えられていることが分かった。その中

で、有意差は見られなかったが、「感謝 (r=.14)」「平等 (r=.14)」「人権 (r=.12)」「個性の伸長 (r=.11)」「正義 (r=.10)」「生きる喜び (r=.15)」と関係する傾向が見られた。

(3) 責任感・勇気・誠実・強い意志・我慢

「思いやり」と負の相関傾向が見られ、「自由・人権・平等」と正の相関傾向が見られなかったものが、責任感・勇気・誠実・強い意志・思慮深さ・我慢・探究心・理想の実現などであった。

「責任感」は「自律 (r=.41,p<.01)」、「勇気 (r=.35,p<.01)」、「自主 (r=.29,p<.01)」、「自信 (r=.28,p<.01)」などと正の相関が見られた。また有意差は見られなかったが、社会への奉仕、礼・礼儀、正義、探究心、沈着冷静、信義、信念、ルール尊重、社会連帯の精神、規律尊重、秩序尊重、勤労、恥を知る、真面目、共同、譲り合いなどと関係する傾向が見られた。

次に「我慢・忍耐・堪忍」は相互に正の関係にある。それ以外の行為との関係を見てみると、有意差は見られなかったが、「我慢」では努力、強い意志、「忍耐」では努力、「堪忍」では思慮深さなどと関係する傾向が見られた。

ここから「努力」「強い意志」「思慮深さ」がどのように広がっていくかを見てみた。すると、有意差は見られなかったが、「努力」では個性の伸長・勤勉。「強い意志」では思慮深さ・個性の伸長・自律・正義。「思慮深さ」では謙遜 (r=.35,p<.01)・寛大 (r=.24,p<.05)・強い意志・正直・自主・人情・恥を知る・真面目・節度・自信・義理などと関係する傾向が見られた。更に「個性の伸長」がどのように広がっていくかを見てみた。すると「探究心 (r=.47,p<.01)」、「向上心 (r=.44,p<.01)」、「理想の実現 (r=.31,p<.01)」を始め、創意工夫・勉学・勤勉・努力などと正の相関関係が見られた。また有意差は見られなかったが、勇気・強い意志・勤労・自由・健康・希望などと関係する傾向が見られた。

次に「誠実」は「良心 (r=.22,p<.01)」、「正直 (r=.21,p<.05)」と正の相関関係が見られた。また有意差は見られなかったが、真面目・勤勉・責任感などと関係する傾向が見られた。

(4) その他

今回の項目分類作業において、「時を重んじる」と「明朗」は他の項目との類似性が見られないうものとして選定された。また「衛生・健康・安全」と「規則正しい生活・健全な異性愛」が相互に関連するものとして選定された。「衛生・健康・安全」は相互に関連しつつ、他の行為とも類似した関係を示した。

「健康」では「健全な異性愛 (r=.39,p<.01)」、「規則正しい生活 (r=.31,p<.01)」となっており、有意差は見られないが、整理整頓・安全・衛生などと関係する傾向が見られた。「安全」や「衛生」においても健康な異性愛・規則正しい生活・整理整頓・健康などと関係する傾向が見られた。

「健全な異性愛」では「規則正しい生活 ($r = .54, p < .01$)」「整理整頓 ($r = .38, p < .01$)」「健康 ($r = .38, p < .01$)」「衛生 ($r = .34, p < .01$)」「安全 ($r = .23, p < .05$)」であった。「規則正しい生活」では健全な異性愛・整理整頓・健康・衛生と正の相関が見られたほか、有意差は見られなかったが、金銭の活用・節約・自律などと関係する傾向が見られた。

調査2：「形容詞（形容語）対」の評定の難易度および評定の適切さの程度について、調査対象者5人の平均値をそれぞれ求めた。その結果、難易度の平均値は3.78点 ($SD = .58$)、上位1/3項目（66項目）の得点は4.00点以上、下位1/3（52項目）の得点は3.60点未満であった。適切性の平均点は3.72点 ($SD = .60$)、上位1/3項目（66項目）の得点は4.00点以上、下位1/3（50項目）の得点は3.50点未満であった。

難易度および適切性についてのクロス表（表2）を作成したところ、難易度・適切性共に、上位1/3に入る道徳性の下位項目、即ち道徳性を考えるに当たり、評定が容易であり、且つ適切だと判断された項目は151対中、55項目であった。SD法では、一般的に「評価」「力量」「活動」の3因子に分類しているが、道徳性の意識構造を測定するに当たり、3因子が適切かどうかを先ず検討する必要があると考えられるので、ここでは無理に分類することを行わないことにした。詳細を見ると、「積極的－消極的」「豊かな－貧弱な」「感受性の鋭い－感受性の鈍い」などが難易度・適切性の評価得点が高く、「騒がしい－大人しい」「澄んだ－濁った」「価値のある－価値のない」などSD法の調査で用いられる一般的な「形容詞（形容語）対」が、難易度・適切性の評価点が低くなっている。これは道徳性の意識構造を測定するということを前提としたことによる結果なのであろうか。

現代日本人における「道徳性」に関する意識構造の心理学的解明の試論

(高) 4.00点以上 (66項目)						
<p>積極的－消極的 (4.8 : 4.8)</p> <p>感情的－理性的 (4.8 : 4.4)</p> <p>温かい－冷たい (4.8 : 4.8)</p> <p>依存した－独立した (4.8 : 4.8)</p> <p>傲慢な－謙虚な (4.8 : 4.8)</p> <p>公平な－不公平な (4.8 : 4.6)</p> <p>感情的－理論的 (4.75 : 4.5)</p> <p>無法状態の－法律で守られた (4.75 : 4.75)</p> <p>優しい－きつい (4.67 : 4.33)</p> <p>柔和な－厳しい (4.67 : 4.33)</p>	<p>注意深い－不注意な (4.6 : 4.6)</p> <p>公的－私的 (4.6 : 4.4)</p> <p>合理的－合理的でない (4.6 : 4.2)</p> <p>図々しい－控え目な (4.6 : 4.6)</p> <p>丁寧な－いい加減な (4.6 : 4.6)</p> <p>依存した－自立した (4.6 : 4.6)</p> <p>受容的－拒否的 (4.5 : 4.25)</p> <p>穏やかな－荒々しい (4.5 : 4.5)</p> <p>公共的－利己的 (4.5 : 4.5)</p> <p>開放的－閉鎖的 (4.4 : 4.0)</p>	<p>豊かな－貧弱な (4.4 : 4.0)</p> <p>本能的－理性的 (4.4 : 4.0)</p> <p>支配的－服従的 (4.4 : 4.4)</p> <p>自発的－強制的 (4.4 : 4.4)</p> <p>未熟な－成熟した (4.4 : 4.25)</p> <p>保守的－革新的 (4.4 : 4.4)</p> <p>法的拘束のある－ない (4.4 : 4.4)</p> <p>健康的－健康的でない (4.25 : 4.0)</p> <p>外面的－内面的 (4.25 : 4.0)</p> <p>友好的－闘争的 (4.25 : 4.25)</p>	<p>能動的－受動的 (4.2 : 4.5)</p> <p>強制された－自由意志の (4.2 : 4.0)</p> <p>理論的－実践的 (4.2 : 4.0)</p> <p>理想的－現実的 (4.2 : 4.0)</p> <p>平等な－不平等な (4.2 : 4.4)</p> <p>威張らない－威張った (4.2 : 4.2)</p> <p>図々しい－慎ましい (4.2 : 4.2)</p> <p>情け深い－薄情な (4.2 : 4.4)</p> <p>義務的な－義務的でない (4.2 : 4.0)</p> <p>利害関係のある－ない (4.2 : 4.4)</p>	<p>常識的－非常識な (4.2 : 4.4)</p> <p>常識のある－ない (4.2 : 4.4)</p> <p>重い－軽い (4.0 : 4.0)</p> <p>健康的－不健康な (4.0 : 4.25)</p> <p>硬い－柔らかい (4.0 : 4.4)</p> <p>永続的－一時的 (4.0 : 4.0)</p> <p>一貫した－矛盾した (4.0 : 4.5)</p> <p>信頼できる－できない (4.0 : 4.0)</p> <p>親密な－疎遠な (4.0 : 4.6)</p> <p>横柄な－従順な (4.0 : 4.2)</p>	<p>単純な－複雑な (4.0 : 4.4)</p> <p>科学的－非科学的 (4.0 : 4.0)</p> <p>感受性の豊かな－乏しい (4.0 : 4.0)</p> <p>感受性の鋭い－鈍い (4.0 : 4.0)</p> <p>経済的－無駄な (4.0 : 4.0)</p>	55項目
<p>丁寧な－投げやりな (4.75 : 3.6)</p> <p>きちんとした－だらしない (4.2 : 3.8)</p> <p>ほのぼのとした－びりびりした (4.2 : 3.8)</p> <p>功利的－功利的でない (4.0 : 3.75)</p> <p>親しみやすい－にくい (4.0 : 3.8)</p> <p>合理的－非合理的 (4.0 : 3.8)</p> <p>未熟な－老練な (4.0 : 3.5)</p> <p>保守的－進歩的 (4.0 : 3.75)</p>						8項目
<p>新しい－古くさい (4.33 : 3.33)</p> <p>利己的－利他的 (4.2 : 3.4)</p> <p>明るい－暗い (4.0 : 2.75)</p>						3項目

考察および結論

調査1：取り立てて道徳性に興味・関心がある訳ではない女子青年を対象に、道徳の下位項目111項目について、その言葉の意味が不明だったり、イメージが湧かないものを除きつつ、類似概念であると判断した行為をグルーピングして貰った。その結果、調査対象者の1/4である10名(25.64%)以上の者が意味不明と選択したものは、「不撓不屈」「廉潔」など13項目であった。これらは日常的に見る機会が少なくなった言葉であると言えよう。

39名全員によって意味が分かると判断された項目は、例えば「思いやり」「感謝」「平等」「人権」「自由」「誠実」「正直」「国際理解」などであり、日常的に使用されている道徳に関する言葉がこれらであることが推測される。しかし字面と意味が離れていることばもあるので、グルーピングされたものをそのまま、項目の整理に利用することはできないが、いくつかの傾向を知ることができた。

道徳に関する項目分類

(1) 思いやり

「思いやり」を大切にしようという教育の成果であるのか、「愛」に関する項目は「思いやり」という言葉一つで表現されるようになってきたかのようである。ところで今回の項目分類作業の結果からは、「愛」がどのような対象に向けられているのか、その対象・範囲の広がりについてを知ることは困難である。どちらかといえば、身近な人間関係に関する行為と、非常に抽象度が高い行為に二極化しているように思われるが、確証はない。

更に、「思いやり」と負の相関傾向が見られた行為が、意志や信念をもって、「何かを成し遂げる」というものであったということは、最近の日本人の行動傾向として、仕事が長続きしないとか、勤勉さに欠ける、ルールが守れないなどという指摘と関係しているのかもしれない。「思いやり」という言葉で代表される行為自体に問題があるのではなく、身近な人間関係に対する「思いやり」に比重がかかり過ぎ、「成すべきこと」に対する思いが至らないということなのであるうか。「思いやり」の対象が広がりを見せないのは、こうした「成すべきこと」に対する態度が不足していることと関係しているのかもしれない。

(2) 自由・人権・平等

「平等」ということが、他人の名誉を傷つけず、人権を守り、国際理解にも役立つ、国民の義務だと認識されているということであろうか。ところで、「平等」と「区別すること」が混同されてはいけないという重大な問題がある。今回の項目分類作業では、ここまで明らかにすること

はできなかったが、平等、即ち、「皆同じ」という感覚はむしろ、自他それぞれの長所・短所を理解する以前に、思考を中断しているとも考えられる。したがってもしも真の国際理解を深めるのであれば、人間は平等であるという当然のことを問題とするのではなく、それらを前提とした上で、国、人種、性別、年齢の「区別」をする意識を持つことを学ばなければいけない状態にあることを示唆しているのかもしれない。

また「自由」については、抑制を効かせなければならないという思いが強くなってきているのか、他の道徳に関する行為と関係が弱いという傾向が見られた。関係が見られるのが、平等・人権・個性の伸長・正義などである。即ち、それらを守るためには、自由が許されるということであろう。また「生きる喜び」とも関係していることから、生きる者として当然の権利として自由があるという意識が根底にあるということではないだろうか。

先に上げた「思いやり」は身近な人間関係をそつなく、無難にかわしながら生きていくレベルのように思える。そして最終的には、「人権」という言葉によって保障された「自由」によって、「個性伸長」のための道を選択することが許されるべきだと思っているということになるのではないだろうか。また「他人の名誉を傷つけない」という行為と「ルール尊重」が関係しているが、それは「自分が傷つけられた」場合には、相手が「掟破り」をした「思いやり」のない人間として捉えて、それならば自分も同じことをやる権利があるだろう、そういう自由が保障されているはずだということになっているのかもしれない。

(3) 責任感・勇気・誠実・強い意志・我慢

「思いやり」と負の相関傾向が見られ、「自由・人権・平等」と相関傾向が見られなかったものが、責任感・勇気・誠実・強い意志・思慮深さ・我慢・探究心・理想の実現などであった。

これらを束ねる行為が「強い意志」である。最近の若者は「優しいが、ひ弱で、根性がない」などと言われることがあるが、「思いやり」ばかりを強調した結果、起きた問題なのかもしれない。自分自身のために向上心を発揮することが、競争して誰かを追い落とすことになるという間違った信念を持たされてしまっているのかもしれない。若者たちは自分自身の向上が社会への貢献に繋がるという夢や希望を喪失させられてしまっているのかもしれない。実際に、今回の項目分類作業においても、「希望」と関係する項目は、有意差は見られなかったが、個性の伸長・友情・自律・生きる喜びなどとは正の相関傾向が見られた。ところが国際親善・社会への奉仕・郷土愛・愛国心・努力・向上心・勤労・勉学・自信などとは負の相関傾向が見られた。これらのことから若者たちに「希望」を持たせるべきだという抽象的な議論をすることも大切であろうが、今、目の前にあることを一生懸命やることの大切さ、そしてそれが社会の発展に繋がるということを教えることも重要なのではないかと考えさせられた。

(4) その他

「規則正しい生活」が、小学校低学年の道徳の教科書で取り上げられているが、正に安全で、健康的な生活全般を支えているのが規則正しい生活だということが示された結果だといえよう。規則正しい生活を送ることができるようになることで、金銭感覚、健全な異性愛を獲得することに繋がるということが示されたということであろう。近年、気軽にローンを組み、結果的に経済的に破綻を来すギャンブル依存症の問題、性犯罪・性風俗への一般人の浸透ぶりは、直接要因として上げられないかもしれないが、「規則正しい生活」という生活の基本姿勢の乱れと関係しているのではないかということが伺われる。

コンビニエンス・ストアの功罪として、24時間営業が上げられる。幼い子どもを夜中、親が自分たちのペースで連れ回していることは、子どもたちから夜は暗くなり眠る時間だという、自分の外界に物理的な規則があることを学ぶ機会を奪っている。そして朝、明るくなって起きるといった基本的な生活習慣、規則正しい生活を奪うことになる。それが将来、大きな問題を生起させる可能性があることを、この分類作業結果は語っていると思う。

調査2：「道徳」について興味・関心の高い成人を対象に、道徳性の意識構造の内、情緒的な側面を測定するSD法に使用する「形容詞（形容語）対」についてその評定の難易度および適切さを検討した。その結果、一般的に使用される「形容詞（形容語）対」が落ちてしまったが、これらを残すかどうかという問題がある。

「調査1」において見られたように、道徳的に良いと思われる行為の多くが「思いやり」に代表されている。調査2の調査対象者が教育現場に関わっているので、一般の人々に比べて、よりその傾向が強く表われ、「思いやり」を測定するのに相応しい「形容詞（形容語）対」が選定されたのかもしれない。しかし「思いやり」に代表される行為だけが道徳的に良い訳ではない。「思いやり」を強調することで、「強い意志」に関係する行為の比重が軽くなっていくことは好ましい状態とは言えない。それらを測定する際、必要な「形容詞（形容語）対」を残しておく必要があると感じた。

参考文献

- 阿部洋子 1996 道徳性尺度作成の試み—予備的研究 日本女子大学 紀要 人間社会学部 6, 161-177
 阿部洋子 1997 道徳性尺度作成の試み—予備的研究(2) 日本女子大学 紀要 人間社会学部 7, 101-123
 阿部洋子 2001 現代日本の成人女子における罪悪感に関する意識構造 日本女子大学 紀要 人間社会学部 11, 101-137
 阿部洋子 2004 現代日本人における「道徳性」の意識構造の心理学的解明の試論 跡見学園女子大学 文学部紀要 37, 1-16